須田桃子

科学ジャーナリスト
NewsPicks副編集長

大学・大学院修士課程で物理を学ぶ

2001年４月　毎日新聞社に入社

2001年４月～2006年３月　水戸支局

2006年４月～2020年３月　科学環境部

2016年９月～2017年８月　米国留学（合成生物学取材）

2020年4月～　NewsPicks（ニューズピックス）編集部

＜これまでの主な取材分野＞

生命科学、再生医療、科学技術政策、宇宙など科学全般、気候科学

生殖補助医療など医療分野、東日本大震災・福島原発事故、地震・火山

迫るアジア
どうする日本の研究者
毎日新聞科学環境部
理系白書3
転落した科学技術国家
日本のこれからの戦略
最新刊
講談社文庫
毎日新聞科学環境部
須田桃子
捏造の科学者
STAP細胞事件
大幅増補で真相に迫る完全版
大宅賞受賞作
科学者の倫理を
根源から問う傑作
——佐藤優
文春文庫
合成生物学の衝撃
須田桃子
新型コロナウイルスのワクチンを最速で開発
ノーベル化学賞「CRISPR-Cas9」
軍部による巨額の投資
生物を人工的に作るテクノロジーは
天使か、悪魔か——
『捏造の科学者』の著者
渾身の科学ノンフィクション
文春文庫
こうのとり追って
晩産化時代の妊娠・出産
毎日新聞取材班
抗えない「卵子の老化」。男性不妊。
育症患者140万人。"的中率99%"の新型出生前診断。
い不妊治療の成功率。のしかかる心身の負担——。
子を産むことは
難しいことなのか……?
平均初産年齢30歳を突破
最先端に追る初の本格的ルポ。
誰が科学を殺すのか
THE DECLINE AND FALL OF THE JAPANESE SCIENTIFIC EMPIRE
科学技術立国「崩壊」の衝撃
毎日新聞「幻の科学技術立国」取材班 著
定価:本体1500円(税別) 毎日新聞出版
「選択と集中」、そして「効率」を求める政策が研究力を低下させ、大学を破壊する。日本の学術に輝きを取り戻す必読の書。
——山極寿一
京都大学長
合成生物学は社会に何をもたらすか
島薗進／四ノ宮成祥 編著
木賀大介
須田桃子
原山優子
著
生命をつくる時代が始まっている！
遺伝子治療や感染症対策など
多くの可能性を持った合成生物学
はたしてそのテクノロジーを
統御することができるのか
専修大学出版局

【超図解】驚愕の10兆円。大学ファンドのすべて

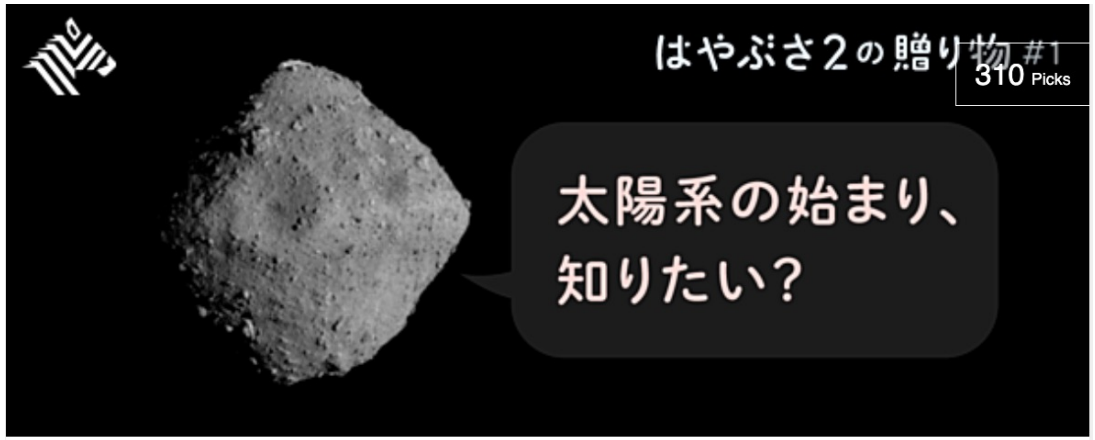
NewsPicks編集部 2022年09月26日

【ノーベル賞決定】ペーボ博士、日本メディアに語る

NewsPicks編集部 2022年10月05日

【衝撃】アカデミアで横行する大量雇い止めとやりがい搾取

NewsPicks編集部 2022年09月29日



【週末に読む】小惑星からやってきた「黒い石」が語ること

NewsPicks編集部 2022年10月08日

精子バンクの衝撃

2020年11月28日　6話公開中

精子バンク。それは健康なドナーから集めた精子を凍結保存し、販売するビジネスだ。海外では多くの企業が誕生し、成長産業となりつつある中、ついに不妊大国・日本への進出を図る企業も出始めた。日本人がほとんど知らない、驚くべき現状と課題を紹介する。

第１回から読む

授乳：照れずにおっぱい　お乳あげ、語りあう「ショー」人気

毎日新聞　2005.04.21　東京朝刊　17頁　家庭　(全799字)

◇茨城県つくば「モーハウス」

赤ちゃんにお乳をあげながら語り合う「授乳ショー」が、共感の輪を広げている。茨城県つくば市の授乳服専門店「モーハウス」（光畑由佳代表）が地元の人たち向けに始めたが、授乳の恥ずかしさで引きこもりがちなママたちに勇気を与える場として、口コミで人気に。これまで全国各地で約４０回開き、６月には

いばじん：ここが聞きたい／１２０　授乳服・光畑由佳さん　／茨城

2005/03/29 毎日新聞　地方版 26ページ 1258文字

◇外に出て、精神的自由を

胸元が見えないように工夫され、いつでもどこでも赤ちゃんに母乳をあげられる授乳服が、母親の間で人気を呼んでいる。子育て中のママたちが運営し、全国から注文が相次ぐつくば市の授乳服専門店「モーハウス」の代表、光畑由佳さんに、授乳服に込めた思いを聞いた。【須田桃子】

――授乳服作りのきっかけは？

◆８年近く前、ＪＲ中央線の電車内で生後１カ月の二女が空腹で泣き出し、やむなくブラウスの前を開けて授乳しました。周囲の注目を浴びて恥ずかしかったうえ、同じく授乳期だった友人からは「信じられない」という反応。「非常識なことをしてしまった」と落ち込みました。

本来、自然で楽なはずの母乳がなぜこんなに場所を選ぶのか、と疑問がわきました。すでに米国で販売されていた授乳服を試しに着てみると、想像以上の開放感。「これなら子供を連れてどこへでも行ける。皆に教えてあげたい」と思いました。海外からの取り寄せは時間が掛かり、欧米人とは体形も違う。より日本人にあったデザインのものを作ろうと、仲間を集めて製作を始めました。現在のスタッフは約３０人。すべて女性で、ほとんどは子連れの母親です。

ブラジャー：「授乳用」ヒントに、体にやさしく　乳がん患者らに好評で開発

2010/07/16 毎日新聞　朝刊 19ページ 529文字

◇ワイヤ、ホック使わず　しめつけ感なし

授乳服メーカー「モーハウス」（茨城県つくば市）が、東京都立産業技術研究センター墨田支所と共同で、授乳期に限らず幅広い層の女性に向けたユニバーサルデザインのブラジャーを開発した。授乳用ブラが、乳がん患者や授乳を終えた母親の間で好評だったことがきっかけになった。

同社の授乳用ブラは、ワイヤやホックがなく、幅広の肩ひもやアンダー（胸の下の帯状の部分）で胸を支えて血行を妨げず、楽に授乳できるとして１０万枚超のヒット商品になった。楽な着け心地から乳がん患者や授乳を終えた母親などにも広がり、一般的な製品の開発を求める声が高まった。

人模様：授乳服通した活動を報告　光畑由佳さん

2016/08/06 毎日新聞　夕刊 8ページ 425文字

「子連れ出勤」の推進などで知られる茨城県つくば市の授乳服メーカー「モーハウス」代表、光畑由佳さん（５１）＝写真＝が、南米ペルーで開かれたアジア太平洋経済協力会議（ＡＰＥＣ）の「女性と経済フォーラム」で取り組みを披露した。会場の反響は大きく、「子育て中の女性がなかなか活躍できない日本は遅れていると思っていたが、多くの国も同じ問題を抱えていると感じた」と語る。

電車の中で泣く子供にやむを得ず授乳した経験から、肌を隠したまま簡単に授乳できる下着や服を約２０年前に開発し、起業した。乳幼児を連れての出勤を勧め、「授乳ショー」などのユニークな試みを通して、子育てを障壁としない働き方やライフスタイルを提案してきた。

母親たちの社会参画を妨げる、目に見えない「ガラスの壁」が今もあると指摘する。「ケアシステムの整備や教育など外からの働きかけで『壁』を壊していくことも大事。でも一番必要なのは、女性自身が一歩を踏み出す勇気を持つことだと思います」【須田桃子】

今どきお産事情：／１　出産施設、減少の一途　リスクに応じ産院選び

2009/02/13 毎日新聞　朝刊 12ページ 2013文字

　晩婚化に伴い、女性が生涯に子供を産む機会は減った。その分、より納得できる出産を希望する女性は多い。医療の技術も進む。様変わりした出産事情に直面した記者が、自身や妻の妊娠・出産で感じた体験から、課題と解決に向けた取り組みを探った。１回目は出産施設が減るなか、どこで産むのかを考えた。

　◇助産院、総合病院…特徴把握して

　東京・代官山の「育良（いくりょう）クリニック」（東京都目黒区）。和室を備え、出産現場への夫や子供の立ち会いを認めている。いざという時に帝王切開もできる。「安全な環境下での自然分娩（ぶんべん）」を理念に掲げ、扱った出産数も１０年間で５倍の年間６３０件に増えた。だが、ここ１、２年は様子が変わってきた。浦野晴美院長は「以前は理念に共感して来る女性が多かった。最近は『他に受け入れ先がない』という理由で来る人が増えた」と憂える。

　妊娠・出産・育児サイト「ベビカム」の運営団体が０７年、ネットを通して妊娠中の１８９人に聞くと、８人に１人が「産みたいと思った施

今どきお産事情：／６　「母乳だけで」意欲強く　栄養、免疫…研究進み広まる利点

2009/03/20 毎日新聞　朝刊 18ページ 1715文字

　◇「十分出ない」悩む人も－－思い詰めず相談を

　「赤ちゃんを腕だけで支えないで、クッションや枕を上手に使って」。１月、東京都新宿区の「オケタニ母乳育児相談室東京」での「プレママ教室」。出産後、順調に母乳育児ができるようにと、出席した妊娠５～１０カ月の女性５人は新生児と同じ約３キロの人形をひざに乗せ、助産師から授乳時の赤ちゃんの抱き方の指導を受けた。故郷・福島県での出産を予定している都内の女性（３３）は「母乳が出るかどうか不安で参加した」と話す。相談室の武市洋美さんは「産む子どもの数が減り、今のお母さんは何でもやってあげたいという意識が強い。母乳がよいと聞き、『母乳だけで頑張りたい』という人が増えた」と話す。

　◇　◇

　母乳育児支援を進める神奈川県立こども医療センターの大山牧子新生児科医長は「近年研究が進み、母乳の良い点がたくさんわかってきた」と話す。

　母乳には多量の免疫物質が含まれている。特に産後数日間に分泌される「初乳」には免疫グロブリンＡという物質が多い。この物質は、赤ち

母乳を知る：／下　服薬ほとんど影響なし

2009/11/20 毎日新聞　朝刊 17ページ 2119文字

◇授乳中止の不利益多く　わずかに禁忌薬も

静岡県に住み、２児を育てる主婦（２９）は今年７月、風邪をひいて近所のかかりつけの内科医を受診した。生後５カ月の長女に授乳中であることを告げると、医師にこう言われた。「薬は飲んでもいいけど、おっぱいはやめてください」

長女は完全母乳で育てていて、離乳食も始めていなかった。「３８度の発熱があってつらく、早く治したいけれど、おっぱいは簡単にはやめたくない。困りました」。悩んだあげく、出産した産科医院に電話で相談。薬の名前を伝えて調べてもらうと、赤ちゃんに問題のない薬だと分かった。授乳しながら処方された４日分をすべて服用し順調に回復した。

長男（３）の授乳中も、似たような経験が何度かあったという。主婦は「授乳中と言うと、医師に嫌な顔をされたり、やめるよう遠回しに促されることもあった」と振り返る。

ベビーマッサージ：親子癒やす　効果、科学的にも実証／触れ合い楽しんで

2010/04/23 毎日新聞　朝刊 17ページ 1737文字

「オイルはたっぷり手になじませて。お母さんの温かい手で、やさしく触れてあげましょう」

今月中旬、東京都杉並区の「たらちね助産院」で開かれたベビーマッサージ教室。講師の大坪三保子・助産師が声を掛け、マッサージが始まった。

参加したのは生後３～６カ月の赤ちゃんと母親５組。バスタオルの上に裸の赤ちゃんを寝かせ、手遊びを交えながら、下半身から上半身、顔、頭へと、手のひら全体を使って丁寧になでていく。

カンガルーケア：安心への模索／上　母の胸の上、心肺停止

2009/12/09 毎日新聞　朝刊 13ページ 1686文字

　出生直後の赤ちゃんが、母親の裸の胸の上でひとときを過ごす「カンガルーケア」。「赤ちゃんが落ち着く」「母乳の出がよくなる」といったメリットが指摘される一方、ケア中に重体に陥る事故が起きていることは知られていない。安易な拡大を心配する医療関係者の間では、事故を防ぐための取り組みが始まった。【元村有希子、須田桃子】

　◇分娩室離れた助産師　回復ないまま４年

　０５年１１月１日午前６時１１分。関東地方の大学病院で、早乙女みどりさん（仮名、当時３８歳）は女児を出産した。体重３０９０グラム。へその緒を切ると、助産師はみどりさんの裸の胸の上に裸の赤ちゃんを乗せた。カンガルーケアのスタートだ。

　夫の浩さん（同、当時３６歳）は、様子をビデオに撮った。親類に連絡するためその場を離れ、戻った時には様子が一変。看護師が慌ただしく出入りする分娩（ぶんべん）室から、赤ちゃんの姿は消えていた。医師は「ケア中に心肺停止状態となり、脳が一時的に酸欠状態となった。新生児集中治療室（ＮＩＣＵ）で治療する」と説明した。

カンガルーケア：安心への模索／下　深めるきずな、医療者支え

2009/12/16 毎日新聞　朝刊 18ページ 1672文字

　◇母子の「特別な時間」　産科医ら指針作成

　「赤ちゃんの重みや体温を感じた時、陣痛と疲労でマイナスだった気持ちが、プラスに変わっていった」。横浜市旭区の聖マリアンナ医科大横浜市西部病院で１１月に出産した小島麻美さん（２４）＝同市泉区＝は、長男凌ちゃんのカンガルーケアを笑顔で振り返った。

　２時間のケア中、凌ちゃんは麻美さんの胸の上で穏やかな表情を見せ、もぞもぞ動いたり、周囲を見回すような仕草を見せた。麻美さんは「やっと会えたね」と話しかけ、夫、淳さん（２６）が傍らで見守った。「あっという間に過ぎました」

　同病院は９０年代半ば、正常分娩（ぶんべん）の母子を対象にカンガルーケアを始めた。生まれたばかりの赤ちゃんは生後しばらく意識が鮮明な覚せい状態が続き、母親の五感も研ぎ澄まされている。「感受期」と呼ばれる特別な時間だ。周産期センター副センター長の笹本優佳医師は「感受期に母子がしっかりと出会うことで強いきずなが結ばれ、その後の育児の基礎になる」と話す。